京都大学	博士（　医学　）	氏　名	及　川　沙　耶　佳
論文題目	Cultivating cultural awareness among medical educators by integrating cultural anthropology in faculty development: an action research study （医師を対象とした指導者養成プログラムにおける文化人類学授業の開発：アクションリサーチ）		

（論文内容の要旨）

【背景】医師が教育に従事する際、自身や学習者が所属する集団の文化的・社会的文脈に意識的であることが求められている。医師の指導能力の向上を目的として、指導者養成（Faculty Development）が行われるが、どのようなカリキュラムが医師の文脈に対する意識を涵養するのかは明らかにされていない。本研究では文化人類学者と医学教育専門家が連携し、事例の振り返りを主体とした授業を開発・実践し、本授業が参加者に与える影響について分析した。

【目的】本研究の問いは 1）医師を対象とした指導者養成プログラムにおける文化人類学の授業について、その開発過程や授業モデルはどのようなものになるか、2）本授業は参加者に対してどのような中長期的な影響を与えるか、という 2 点である。

【方法】アクションリサーチの方法論を用いた。医師向けの文化人類学の授業を開発し、2015 年に京都大学で開講した医学教育学プログラムの一環として実施した。本授業は 2 時間のオンライン授業として行われ、参加者は「他施設の取り組みを参考に教育活動をおこなった事例」について発表し、その内容に関して文化人類学者や他参加者から質疑を受け、授業後に事後課題として振り返りを提出した。研究参加者は本授業に参加した 47 名の医師と 3 名の講師（文化人類学者 2 名と医学教育を専門とする医師 1 名）である。2015 年から 4 年間に渡り、授業の録画データや参加者の提出課題、授業後アンケートなどを収集した。また、講師 3 名には個人インタビューを行った。研究期間内に本授業に加えられた変更点については、シラバスや講師へのインタビューをもとに分析し、参加者への影響については収集した質的データに対して主題分析を行った。

【結果】本授業の開発過程において、事例発表と質疑応答にかける時間の拡大、医療現場でのフィールドワークの経験を持つ知識人類学者の講師の追加、文化人類学の専門書を読むためのガイドの提供などが行われた。

本授業が参加者に与える中期的な影響として、「文化相対主義」、「文脈に対する注目」、「リフレーミング」、長期的な影響として、「文脈に対する強い意識」というテーマが導き出され、本授業を受講することで、日々の教育活動や診療において、自身や他者の所属する集団の文化や文脈への意識が高まることや、文化人類学的思考への理解を深めていることが明らかになった。

【結論】文化人類学者との事例の振り返りを主体とする授業の開発過程では、「医学」と「文化人類学」という異分野を架橋するための工夫を要した。また、本授業によって参加者の文化や文脈に対する意識が高まることが示された。このように、医師の文化や文脈に対する意識を高めることは、医学教育現場における相対的な思考や対人理解につながる可能性を有しており、文化人類学者との連携について具体的な方法も含めてその効果を示すことができたことは意義がある。また、本授業が参加者に与えた気づきは、教育という枠組みを超えて、診療にも影響を与えることが示唆されたことは興味深い。今後、医師向けの指導者養成において、文化人類学者などの医学教育以外の専門家が講師に加わることは、学びの可能性を多方面に拡大する可能性がある。

（論文審査の結果の要旨）

医師が教育に従事する際、自身や学習者の文化的・社会的文脈に意識的であることが求められるが、どのような指導者養成プログラムがこの点に寄与するかは明らかにされていない。本研究では、文化人類学者と医学教育専門家を講師とする文化人類学の授業を開発し、4 年間の実践の中でアクションリサーチを行い、本授業に加えられた変更点と、本授業が参加者に与えた影響を明らかにした。研究対象は本授業に参加した医師 47 名と、講師 3 名で、2015 年から 2019 年に行われた授業の録画、参加者からの提出課題、講師インタビューなどの質的データを収集し、主題分析を行った。結果、授業の変更点としては、授業時間の拡大や知識人類学者である講師の追加などが行われた。これは、「医学」と「文化人類学」という異分野を架橋する必要があったためと考えられる。また、本授業が参加者に与える中期的な影響として、「文化相対主義」「文脈に対する注目」「リフレーミング」、長期的な影響として「文脈に対する強い意識」というテーマが抽出され、文化人類学の授業により、医師が教育や臨床における自身や学習者の所属する集団の文脈に意識的になることや、文化人類学的思考を取り入れた新たな枠組みを獲得し、自身の教育活動を省察することに繋がる可能性を示した。

以上の研究は文化人類学の授業が医師に与える影響を分析し、医学教育分野における指導者養成の発展に寄与するところが多い。

したがって、本論文は博士（　医学　）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、令和６年３月５日実施の論文内容とそれに関連した研究分野並びに学識確認のための試問を受け、合格と認められたものである。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日　以降